雙蛟峽

へ13
3584
3

へ13
3584
3

早稲田大學図書館
35.2.2
藏書

金傳

雙蝶白糸冊子第三帙

東都　芍藥亭主人著

福草の巻

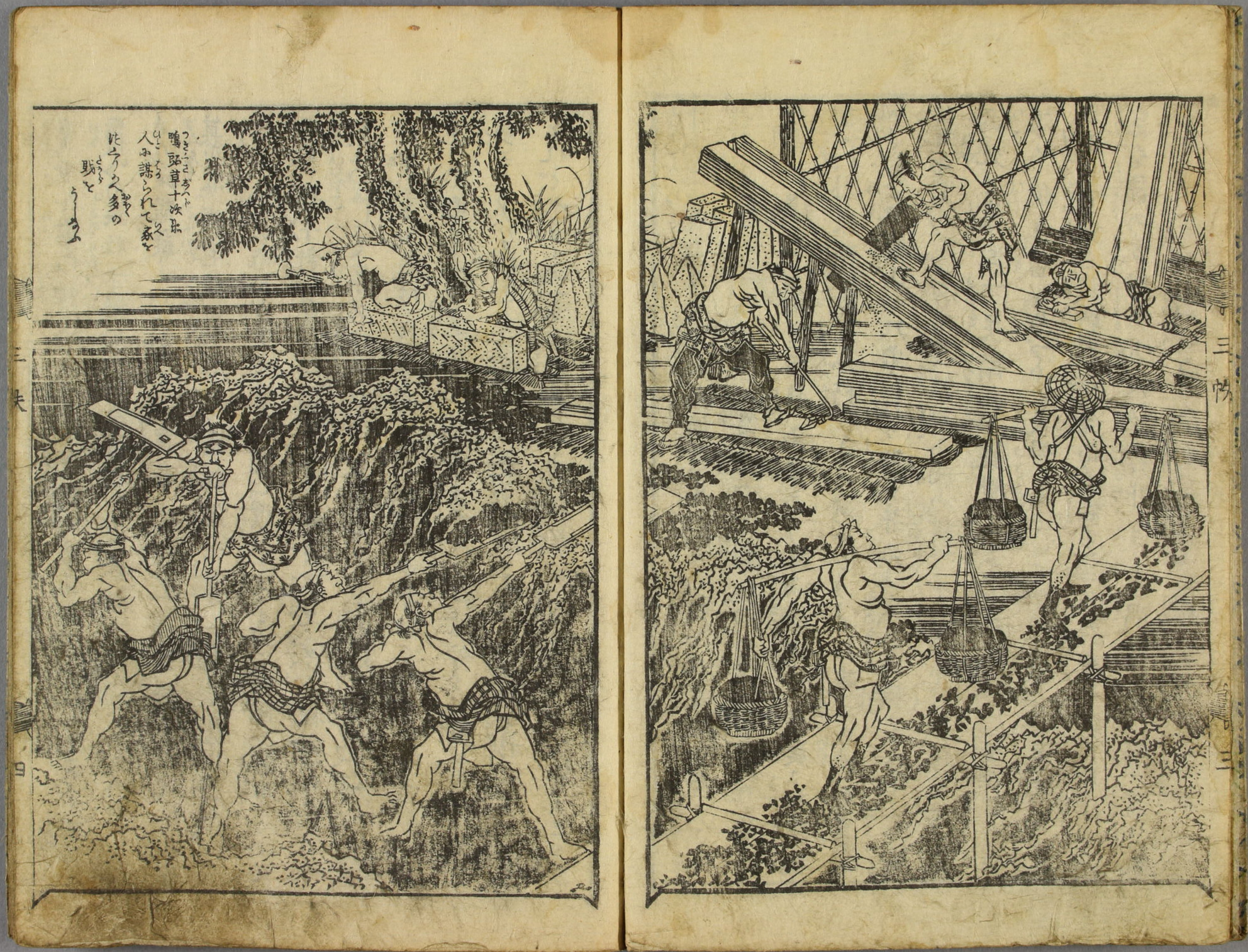
○隅田川とゝ云ふ下流海に入り大なる川なり。此川よりて
周防の国道のわど九町ばかり脇ふ。鴨跡草村といふよ鴨跡草十次兵衛
といふ豪農あり。原此村ふ兄貸二軒の鴨跡草氏あり。南
北ふとうり住しうり十次兵衛が家をば南方とよびまう。北なる鴨跡
草氏を年ゝに家裏へ十年あまり前ふ主の長兵衛ふまうり。
妻の阿関ひとり兒の蝶五郎と携て立退し後を。十次兵衛が家
益富ふ累よりづのゝ足ふ入ぬ本なりしが。妻を阿石と外人れ
女兒を産ゝ後ふ子まうり。後配をも娶へぐありしれあど。男兒を

そのなりてこれのそぞ此家わ足ふねそのゑ山とろ形りろれ。近この
家宅の吉凶と説その都の方より寄りて山はの郭内そいつも吏
なり。此わろうまで其術を信ぜれそのゑ又く。倉庫壊ば礎の下
より銀と藏くれ石匣を出し。竈と換まで土の中より金入を
くれ壺を得。新わ井戸穿ぐ孔方涌を。旧き池を埋ぐ其芝生
ぞ。窓を塞く沈病愈厠を移ぐ窮鬼走りたりなどいひの
きれより。匠人の斬冷れとれ好く。泥工の鏝晞く日形りまと。
十次岳衛此事を伺ひて我家貧宝あまりなりといひども男兒なく。
双親そのとより妻わもとゆくおくれ。又病多し。疑ふらくへ宅相
の凶わやあんと。ひとりに術士とも移さとよせく吉凶と問ふ。術士
前堂。後堂。便室。臥室。書齋。子亭。粧樓。套房。爨舍。浴堂。

周房。牛屋。馬舎。銀庫。米倉。壁櫥。懸榻。烟窓。紙窓より。地の凸凹。
門のかゝ。墻の長さ。溝の深さまでのこり形くゝ。主わ服
そも不告わそぶしく走り出んとを。十次岳衛おどろきて引
め吉凶を問ふ。術士眉ひあつめ。累息つきて詞を不發。おこりに
請ふわおんで小齋わ通ゞ人を屏くいふ中。夫家ハ人の分を
そその命を中ゝ根基わして。盈そその内わ食ひ夜ゝその内
わ寝。上ハ祖先を祀ゞ。下ハ世嗣をまうく。人生の托ところ
大かゝれいなし。人相ゝ吉凶ハ其人一人わ係り。宅相ゝ福其全
家わ係り。人ハ相凶ゝとてあらふゝあ換れるゝし。家ゝ相凶
ゝ造ゝ易し。此家主人ゝれの唯郷と令愛と二人なれ
ば宅大わして人ゝ好さわあらふぞや。門大わして内小く。墻垣ゝ

のこと。井竈其処を不得。地廣く家さくはし。五虚悉そなれ
ア。十次無清ふ宅大はしてくさくなれハ近年接喪再継配ハ
不娉。家法男女の雑居を誡まび。機婦ハ裏の小屋ふ居し。
耕夫ハ門前の家ふ住せ馬士牛兒各房あり。管家隸農都
て外ふ在る。正屋ハ居るの乳媼線娘嫗監侍婢。嬖妾八九人
ふ不過ばなり。内ふ比ばび門の大なれハ祖父の代まで酒坊釀
く酒槽の大うるなじめ。釀具ハ四とうふ出入させん屋ふ
造ばなり。墻垣の不齊ハ家父ゆしその物の盈満を忍
まて都墻の處く杓橋を栽。竹を植ばあり。家より地の廣ハ
穀種。藍靛。紅花。蠶綿。木綿など晞んまうけなり。井と竈と
を移さんいとやとし。術士いふ一の門大ふ一の門小あり。門にれ

下ふ水竇ありて水外ふ流ま出。門口の柱と接ま腋の壁大小ふ
く。門口家の棟ふ對ひ。倉の口門ふ對ひ。門の壁ふ窓あり。廩庫
の前ふ溝あり。便室の後ふ泉あり。西ふ柳。東ふ杏。庭ふ桐棗桃
槿。門外に芭蕉。又ふ朽くうろふなりくれ木。二の池。蝦蟇ふ
似くれ石。家ふつれあくれが如き井あり。庭ふ樹木多く。巨樹
簷あちかく。ちうも甚枝外ふ向ふ。地形平坦なるハ後低く前高
西北と東南不足。南西と北東余あり。正屋高くして左右の屋
矮く。低き墻をとゞ。又堺高くして家と壁くる勢の處見
ゆ。左の空地ふ数軒の小屋あり。右の塹の外ふ数丈の陂池あり。
窓を艮の方坤の方にひくく井を艮の隅。西面ふ構ふ。竈井の
れとりふ居くく圓形なるハ。厨刀甚上ふ横くり。箕甚前ふ俯し。


つきくさ考へ
鳴弦草十次郎
人ゐ謀られて家を
たうらく多の
賊と
うつる

童歌を歌し婢大ゐ笑ひ。厠乾の方ゐありて戌を入るゝ不浄と覆へり。此数十條の凶相今日僕が又家処此一家ゐのとり形く備へり。此説疑しくおぼさは黄帝宅経。三文發秘。地理鴻書保生纂要。相宅類聚。起房圖説。等の書を覧て甚詳なるを知り。僕が偽ざれをさとりまゐらし。僕壮年より各國を歴て相処の家数千軒。しまぐ此家の如き凶を不見幸ゐ祖宗の陰徳善行大ゐして家の亡ゐいとゝざれるべし。宅経ゐいふ宅漸昌るれば室堂をとゝのはれるゆゑなり。家日みをひて繁昌時を其富ゐよりてあゝゝゐ造替ゐれ事多をよ為しかゝば。又衰へざるとば移をるなかまとのゝ。家衰へざるとしてみだりに家を移ハ災を招く。されど此まゝ此家ゐ住まゐんゐ積善の力既ゐつきていゐゆとも為ざるにあらざ。大ゐれ災を手を不出して亦ん。十次兵衛ゆく仏ゐ挿くをひて術士とくゞめおく。血属親族管家のとり形く招き會ひ。術者の言を詳ゐ説をめし。家を造替へ。地の高低ゐ平し。川を穿倉代移さんといふ。其費用数千金ゐおよぐ日来十次兵衛が各喬かゝれゐひきかゝれ所為として。皆顔を見合して言を出を者なゝし。ゐ従醒井覚二なれ者座を進るいふ。鶏を割ゐ牛刀を用るや笑ひん。されど仏ゐ思ゐんるゆいで止べきゐもあらざ。今是戦國なり攻守の道ゐ以比ん。家ハ城ゐして主を将なるべし。城峡将賢を論ゐ。城後ゐ絶壁を負ひ。前ゐ曠野を抱さ。あるいて高山なく。糧草多くありて。泉源不涸。地の利全を得れとも。主将愚はして従卒のとゝろとなれるゝの宅相吉なれども主人者ゐ長じ家族の行悪なるゐ

ろう。強敵の邪神ひはとうかぐらんや。城壕浅く。壁低く。遠く水を汲ば常に雨を湛へ。遠く薪を採ば日ゝ竈を減し。要害いとあくまなるも。守将良しして従士の心和ハ。宅相山なれども主人倹を守て。家族の行慎めるがごとし。奇異の窮愚虚ゝ乗るを得んや。此鴨跖草氏の宅。相凶とも累代連綿て豪農の名世ゝ伝えり。此家。相世人ゝ凶して鴨跖草氏ゝ吉ゝ人今新ゝ川を穿。家を造りて数千金と鄭ゝ則数千金の吉相を欠ゝこそ。吉相の宅を起ゝ各齋ゝんより。凶相の宅ゝ居ゝ血属を賑し。窮民を救ひんそ。其費半ゝ不充して。其徳百倍ゝるぞし。十次糸いゝ我頑なりとらんども幼より國字の冊子をも讀ゝ。今年百ゝあゝぶそで人の欺とらるゝかし。證なるゝ惑

られんや。其説我此年まで疑ゝ符合せり。試ゝ上ゝ

いん川の水逆ゝ流ゝ婦人遂ゝ家の主となれと。川側の孫兵衛が

未亡人を證ともべし。門外ゝ井ありて家ゝ衝あられ体ゝ

行を主ぶれと隣家の阿市猫徒と奔られを證ともべし。中心朽て

空ゝなりる大樹あれば病難不絶と。榎眼の長兵衛をゝられぞし。

家の前後ゝ池あれゝ子孫つぐべしと堀池の市太夫をゝられ

井のゝとりゝ竈を居ゝ家日ゝ衰ゝ。權八食客ゝ

とゝぞや。乾の方に厠をゝられが眼ゝ崇ると。竹七が雀眼ゝ

ずや。正屋川ゝ近く。左の方ゝ井をひて建られ家ゝ水ゝ川ゝ

そ。長男に災ありと。甚六がゝ門前ゝ流あり。水上ゝ

木竹ゝられかゝるなゝば小兒ゝ病あり。雑義がゝ

正屋の右ハ左ハ五六尺ばかり低き墻あれを燕尾屋と号。敲戸を主どれと。柳菴俄ハ衰へゝれを不聞や。塔ありて立みその家ハ覆ひかゝれ体ハ見ゆれと。懸針煞と号。貧窮を主どれ也。鈍平長く艱れを不聞や。正屋平ハして前ハ高き家あり。朱雀口と聞ゝとハ。訟訴不絶。換失を司どれと。三太地界の争論ハ負く分翅をそがれゝが如し。家の後左ハ空地のさし出れとこれハ。別ハ小屋数軒を建れと。青龍尾を擺とハ。戦減く外ハ出れを司どると。支二屠龍の術を学く戦散るハ雲の如。正屋の中に別ハ一の小屋ありて中ハ隔れと。夫婦不睦也。支村の伯六が庭ハ陶器の破碎夥し。艮の隅へハ竈と居れば姑媳不和と。新田の阿妻が家ハ永人の往来あげし。米倉

の後ハ卧房あれを疾病山と称く病者あり。門前ハ二の池あるハ哭字頭と称く哭あり。覚二ハ口の字二双びれ哭字ハ限ぎるや。十次赤ハ然り賢号そうびとし。号ハおど絶く。器そあるハ器そさけハ。罩ハひとそし。器ハうぐれ。單そひと。器そあるなり。呪ハのろハ好りハのづれハ佳なれるハあれん。覚二ハ異ハ鴨を呼ぶなり。刎そ鶏を呼ぶなり。異ハ家を呼なり。祟ハ羊の鳴くなり。罵ハやしるハ。罵そよぶ。器ハうハ。罩ハおハやらん。嚴そつしゝるり。いづとう凶なれるハあれん。

既ハ術者の説を聞るあり。家の前ハ蝦蟇の形の石あれで兒醜ゝと。郷ハ家此ありて女兒不妍そのうへ名ハ石也呼ハ。門口の下ハ溝ありて水外へ流と出れと戦散と。郷ハ家

此るのなりく。今賊を費さんとて。さんど如此そのゝ偶中まことれ
ばり。るんぞ天下の人皆術者の言ひ如くあるんや。天地の度大
造化の妙用一人ゝ力すとして測知れるゆゑ得んや。今愛の容
儀門前の石を穿ちたるとも益ばうまじし。故賊の宅相ゝ土木
の念ゆゑるべくば微なるべし。各位いうゆゑおりひとりの一座を
うつとゝまるに。前ゆ十次郎が説とて皆こゝ出しる処ゆ
きて。其言ゆゑ前ゆ仰られが覚二が論の理ある所ゆ半ゝ
信じ。半ゝ疑ひて公迷ひ。魂惑ひて酔るがごとく。かつゝ否と
いの者るし。十次郎を我女兒の醜るまでいひふいされく覚二
をゆゝまん。各位の助力を請んとも。いとゞそのあれ。我賊を以我
家を造りかんとて。一族のよしをその事を謀るなり。今ゝ

とゝ帰ゝ孫とつと立ゝ奥ゆ入れ。一座うゆをゝあるせちゝく
と座を立ゝ。ゆるば。管家もせんかと形ゝ退るね。十次郎を
翌日より山林ゆ入りて良材を伐。郭内ゆ纏ゝ工匠を集。尾
を焼せ。石を運せ。又縣吏ゆ訴ゝ家の東ゆ大なる渠を
穿て九町あまりなるゆ形陶川ゆ通じ。船の往ゆるゝ
ゆかゝちんとて。術士十次郎にひとし。家を先ゆし。渠ゆ
後ゆ家をのゝり形くとりらじして地を平ゆし。そし
後面を高くし。西南と東北の方ゆ不足ゆし。時春の季ゆ
で南より礎をとじめ。北西東と次第ゆ屋。用工ゆ己巳の日
吉。香を焼。燈火を點し。天神地祇を祭り。家神を拜。用工
大吉の四字を紅紙ゆ写。鉞をじめせゝ。杭木の頭ゆ貼ゆ

立深を上を殊ふ吉辰をえらびて。柱の上下。深の。左右ハいつも
更なり。そべて木の葉。髪の毛。禽獸の羽毛。角の骨。さ
なれ穢の物もつゝざれ。ゆう田。先柱をこゝ立をゝ
後深を上ゞし。前日までに方のゝ〳〵のひて。本日ふいゝ鑿
新ふて柱を穿ち。墨さしあてもれ〳〵つくしめゞ。〳〵槌を
をてうゞかりなれをはしゝゝ。深ハ木の本と家の左ふなし。
中柱を棟より建下して地上の礎ふいゝ〳〵。架柱を入見て中
あてさゝふる事ふるれゞし。桟木皆檜栂を用るゝ。其中ふ
根の柱をはじへく盈をおゝるゝの公をあゝいし。ゆめ柱を接。
ゝる柱を用れるなかゝ。其一ふ便房を造り。次ふ饗堂前堂
より次第ふ群房を造り。一間〳〵の四隅の柱四本ふ孔を穿。内

ふ金銀を藏め。口を木ふて塞ゞ。謹〳〵奴婢ふ知れるゆゑ。
内の家を造りて〳〵後表の門を建ゞし。門柱ハ栗を用ゐ。間
どりハ方〳〵。其の後ゆうハ〳〵。家を南ふ面。窓を東ふ開
ゞしなゞ。地ふ畫を。圖をひ〳〵く懇ふをしへ喻し。これより都
ふ帰ア。東國を巡りて又ゝゝと別を告れよ。十次三歳干の
謝物をあふれども受れるのなゝ〳〵。僕兒あり兄弟ありてはと親ふ
ゝりかゝゞ。此術をゆゝより營生の為あせゞ。四海皆兄弟ふ成ゝば
災を招ゝ。禍ふ罹をゝれふ方のびゞ。我力のおよゞんかゞうゝそ
おりひゝゝしふりゝ。鈇を拂ひて生行ゝ。夫ゝうよゞゞ掟のゝゝして
ゆゝく秋のなゝびふ起房落成ゝく親族ふむゝるに。一人とし
まり歡びをゝとゆれゝものなかりし。これを十次朱生質吾商

夜客十次郎が家ゑ
入りて財宝を残らず
奪ひ去れ

ふして血属いうおれ難難ふあつのあれども扶助このなく。中も鴨跖章長藏と弟の家あてば代く親も特ふゆゆく「ひし」が長藏ら家年を追ひく衰へて「この十年ばかり前ふ長藏久く病く月まうり。妻の阿関二三女の孤と抱くよあべなれをさへえつぐぞ。家の絶れをさへ不顧ふとのあて皆疎こ居し上ふ。日外覚二が慇ふ家と造り替れてのとぐ恐しと聞入るぞ。あるとの賊と費あく新ふ家造せとあくこし故とぞ。又家ふ妻なれへ陰陽金うふざれ象なりとて。塡房をむえまれが女兒の阿石ふ贅夫とべとらで。自知命とそぐこ弟あて老木の孫の狂花いとえべこと弾爪していうあくこあひ。家生奴客の倫までもあるれ居る。かくく一月あまり経るれが雨そげしく風吹くそこ物の響もあやなれ夜駭

多の夜客ものび入り。あちくの庫倉ふみぐれ入り。金銀布帛器財米穀ふいくれまであるとあれこのかぐりおどりなく奪ひ。舟ふ積て新ふたくりくれ渠より陶川ふいくり海ふ出くみげ去りね。夜あけて十次郎起出夜来の嵐ふ墻やいくこし。壁やあちくると家のめぐりえまるれふ。行夜の男二人も木丸と含せらまく樹ふ縛り。後門の扇ひくれ庫倉の鍵ども落散りあれよ驚て。いはしめの縄と解きるれ状と同つあ女人くちはきていふこ。夜ま。そぐれこ祈うちて後門のあくりすぐれ時ふ油紙みてはくいるこのあや。雨も破まね丸れ紙の代やたくれこのくちふ燈火とあくくれを。まみくく携し男二十人ばかりいづちよりう出来り。僕る二人ふ木丸とそはせ樹ふくくこあくこ。倉どもあーひくれ長櫃

ゆうのゝ氏いろゝもなく運ひまり。ひしゝと抱くもおしれ入。茶麥豆のとぐひまぐ。渠のゝろゝを拔出れとこれしが。船ゝ積てや行ゝん。ふくして音も好くなりね。と笑ゝ出行ゝれあゝり目とちぐめそれぐ。壕ゝりあゝるにを俵の塵ひゝろぐゝふゐ。さてハ引路紙知りゝれ倫兒の船ゝ乘て海ゝ出ゝれなりと。主從ありて乞ひゝゝにしハ氏とぐるゝのゝりけるとなん。

○十次兵衛資性鄙吝なれゝかゝりて。一朝ゝ術士の說を信とゝゝ數千金を費せり。他ゝりゝるゝぐ其所業あゆゝふべしとゝんど。そゝゝ揚朱ゝ流涙ひゝろゝと愛ゝれゝのゝ弊ゝゝゝふゝゝり。杓を肩ゝ掛。鞋を足ゝ穿。雪ゝふゝれ。雨ゝふそゝぢ。燈ゝ消ゝ。飯ゝ減ゝて。畜ゝれ金銀ゝぐ氏けゝして佛ゝふゝて

ゝりゝれ徒と異なるゝのゝ氏。宅相の說と慕ゝふゝも。人の家ゝ借て世ゝゝれゝのゝたぐひいゝゝふゝりゝふゝもうひなゝゝん。余ゝる戔ゝりて力のゝぐゝゝゝゝ家ぐゝりせんハ其家ゝべて相よゝれべし。

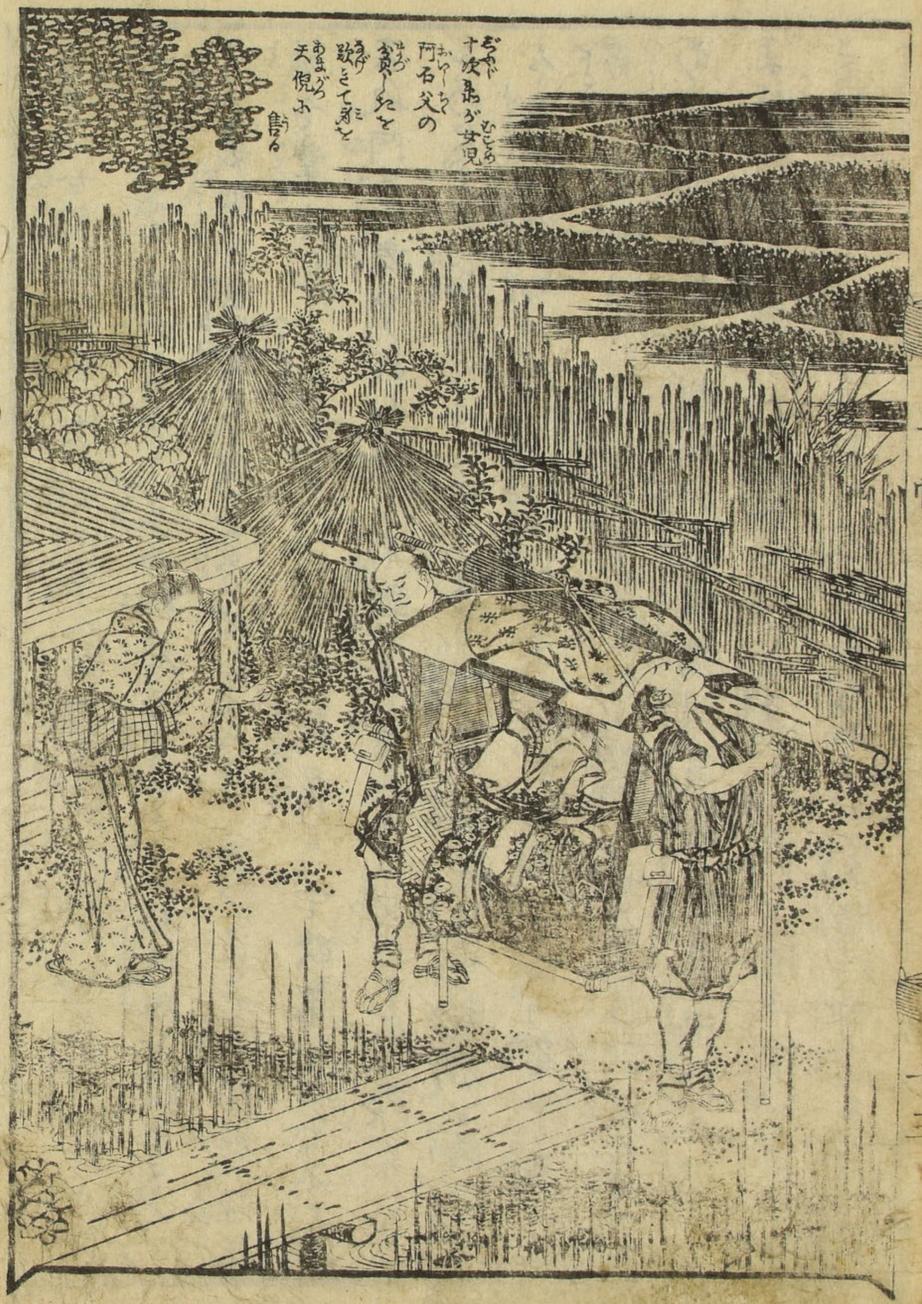
ゝりゝふゝ花街ゝゝゝゝく。遊俠多く。左ゝ酒樓ありて肉の林ゝゝゝゝ。笑談耳をみぐゝり。右ゝ教坊ありて酒の池ゝ湛ゝ。鄭聲ゝゝゝゝゝゝ。少年ゝ育れゝ凶。層樓路上ゝ聳。粧臺後門ゝ通。東ゝ浴堂ありて子弟朝夕ゝ往ゝひ。西ゝ貨店ありて婦日夜ゝ親ゝれハ。處女ゝ養ゝ凶。老ゝ事れ人良医なれ地ゝ凶。臭ゝ鬻る者ゝ清泉なれ町ゝ凶。向ゝ家ゝゝて街廣く往来の人稀なれハ典衣舗ゝ古家北ゝ面く道狹く旅客袖ゝ拂ゝ故衣店ゝ吉。木賈肆ゝ

流水うかぶごと前ふあれども、除邸店ハ空地ク、ゝ後ふ
あるごし。類を以こと〻ゝ推ど宅相の吉凶と識ふ足ん。

○ 烏玉の巻

鴨跡草十次朱を。すゝし夜偷兒ふ財宝をどり、奪ひ去し
より。あしたるものゝかさわりて山林田畑も沽代ゝし。後妻そいゝ
ゝ出行れど。さそゞに世僕奴産なども、えとゝのしくゝ暇
をつかものゝうしうど。今を弊多の人をやなふべたかもなく。親
族をとべて疎やれべいうふとも。せんゝとけたゝ。斯摩ふうなれ家
ふ住ゝうぞくもあふびと。家倉をも人ふ讓りふへ。近ゝをどゝ
おりてぶせなりとて。山口の郭内の所ゝとりに。奥ぬゝ造りゐせし
小なれ家ふうけり。女兒阿石。乳媼の福。家生の權平と唯四人

居りゝ。女兒の阿石ゝ父ふ事へ。福權平の二人もいと実しくゝ
ちゝれふぞ。今ハうゝ多の賊産を守ア。多の田畑をたうさどア。
多の奴婢を畜てゝ家を労せしふ事まれりとて。茶を煎。経代
誦を業として日月をそぐしゝれ。親属も十次朱をとそふくみ
ゝれ。阿石が孝なれを感て米銭などを贈ゝども。父のよゝとびもふぐる
ものゝぐめて益ふしとて返ーゝり。阿石ゝ福を綿を打。糸を絡。權平
ゝ薪を樵。馬代追ひ生計おとゝ。十次朱吝嗇の名いと高りし
男ゝがら。富ゝれ家ふせゝちて。かゝ寡さ世ゝゝりに堪ぞゝも
あふび。公服。褻衣。短襖。汗襦。褌。被衾。方茵より酒飯の儲まで
よゝ省略ゆれど。費用とかゝ多く貧しさ日ふをひていやま
されば。阿石ゝ人ゝゝけ容貌ふもあふば。室積の柳巷ふ名


ぢやの十次郎が女房
門右衛門の
身ゆくへを
聞きとて来たる
天倪ふ

ても父をゆるくすぐさせんその氏。我醜さゆへ夫もよしみ。意やせん用
やせまじとおりひろうふ時ふ。國君の翁主。石見の國三太郎の
蒲冠者範頼の裔とゆへ。吉見大藏太輔頼信のりとに嫁た
まふとて。勝妾。囚人。侍女。女童。執針。女医。舞女。筆姫。女奴まで揃へ
たぶ。翁主の形代ゆなるべき天倪ゆ為女ひとりと厳て。あまりに尋
まふ。此天倪とふは。其原天鈿女命より生て。祇備ゆ老女の面
と造り。肩と胴とに竹筒をとめて。内ゆ護身符を入る。三歳まで足
用て。諸の凶事を負そなれを。此あらの風俗そ。人ゆ嫁なり
ゆへ下ぶ国のそのそ象人を用。宦貴ぶ人をなべて人を用るて。
其選いとむづし。容儀の醜ハゆれせど。未男せね女の五體欠
所なく。痘瘡の痕黒痣ゆどゆろありても用ゆあらぶ。

又偶その選ゆあれそのも入輿の日。顔をさゆめぐに彩光駐し
て。翁主の御前の上の凶事と悪自の対ゆ負ふぶなれが。三年
代をぶぶで必死とふひ侍へ。装金俸銀ハあるとなが。誰徴ゆ
ぶぶのゆしとひそうに聞く。父の負をゆなれぬと見れゆ
ものびぶ。鵶ふひうゆ頬と額とこそさし生れ。膚いと白く
そくようゆもひふちて。ぶぶさゆふ生ふでもあらぶ。灸の痕
だゆゆうけば。媒波ゆふとかり。乳媼あいこやぶうして賜ふとこわ
の俸銀をとうちて父をゆひまるせし。此ふの父うへのいし
まろんゆうふとふゆ。乳媼そかれるゆとゆ知ぶぶよのは紙の
ゆやぶうへぶと公を得て十次ふゆ聞ゆれぶ。十次ふも女児が世ゆ
生れ楷模ぶとよう産ぶびつゆも。年ふけ女児をもいろまでも幼

とおりし居親ごゝろ。ひとりこゝろ出しゆれを公のと思ふ。乳媼あた
ふとこゝ山ぢで。母のいまさぬ後を乳媼うゝで父うへのこゝろと
よく知りてにくるものゆし。妾をゆさうなりし時ふたりゝれ侍婢
のうちを具してまゐらんとて。やがてその日ふもりしぶ父の車
に乳媼。權平にとのこゝろ。裝金を乳媼みあづけ。石見の国ふ
のぐりにうんまでハ音信も間遠ゆゝん。父のこのせゆふこゝのハ
よさにてかゝひてよとて。父の公のあゞしたまでいひなぐさ侍ふ
人ふいざなれ侍媒引具して立出まる。間ゞもあれかゝね家ふ
居ゝ此天倪を暴れるゆど。乳媼の不国。阿石のこゝひとり生る
おがつゆゆし。こゝ阿石がいうゆもして父となぐさんとおりふ公を
ゆうれひゆふ神の法ゆゝなるべし。乳媼を足の徒とるゆふ

ゝ足おゝり。あまりふとゝゆゝたるのひ。又賜ふとこゝの金の
多ふとゝ侍あやしゆど。顔のゝふゝおつゝれど花孃ふ分
餞しゆもあゝざらんと。こゝづゝ同ひ自とゝ人てゆゞて家より。
その日を主従酒酩ゆしてよゝとび。前路往時のゆどもかゝり
けゞけ。ありし世ゆゝふびひとり兒を側をを出しゝゝゆばゝふみさ
せゆゞ。ゆゞゝれいとなみさせんゆゝゝれゞゞ」とゝふ花かふ土
立せつ。乳媼そいうゆおりふとゝゝゝゞ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なれるゆゞゝ。兎ゆも角ゆも母上のゝゆかゝれひしとゝ悲し
きれ。母上のいまさんふハ斯までつと顔そゞけて座のゝりゝ
ゝしを。權平ゝゝを出。おゝそ人の縁分幸と不幸を一年を
ゝふやたゝふゞゝ。春の花發ゝく風雨なく。秋の月圓ゆしく

雲霧なく。夏涼しくして汗衣を汚さず。冬暖かにして風霜を侵ざれそ。富る人の生涯いとうらやましさを不知なり。春余寒の酷さを念じてもぐせば。又霖雨ふりけぐれ。秋残暑れ長を辛らしてのがれば又暴風吹とさび。夏を雷日く鳴とめさて。石を踏で蹠を焦し。冬を雪夜く高く積て。道を行で指をおとさとは。貧れ人の生涯よりつらしさを不知なり。春ふもめぐね春ふさざて。夏山の葉ぐれは。余光のおりひうけぞそと綻びうるわる。我身のうふ秋を知りて。冬の林の枯枝ふ狂気の時得ぞやよ咲出られそ。さじめしくて後よりなり。春の日を暮なぐら。夏の月を梅雨はぐれてうるるなり。秋の夜は朗なぐら。冬の月を波雨ぐらあて不呀は。さじめよくて後めた

なり。明日の天氣今日とうがとしといへども。阿石の方をそうぐ春の年をもちぐしまうね齢ふて父上ふ孝をはくしのへで。天神地祇のめぐみふのもだ。此をえの愛くおろうん揭焉といひなぐさむ。十次郎微笑て。人上寿を百歳中寿八十。下寿は六十といひ。六十年を十二月ふあつまば。五年一月ふあるもり。我如きを冬の年ぐで風雨候ふちぐひ。寒く暑節ふかのひてゆうなり年なれを。地震家をゆりつぶせしとやいん。海笑地を拂ひーとやいんといへど。海笑をいぐまうぐ白波の賊宝を奪しハ仕るのさぶうふと。皆く笑と催しく囚房ふいりね。二旬ぐうをぐて權平主人ふむうひ。かくぐて海家の宸へをてくれ。今更僕一人の力ふて再奪をべきにあうぐ。こうり程

ごへいひらかぶる
雀平水上山
ゆうなんせうの
妙見の社お
とりて
主人十次郎が
さいくわい
福と
祈る
賽銭

ちうた氷上山の妙見の宮ハ。霊験あらたかにして遠き境の人もあまたことびとくやぐみを蒙るこのもくれかくれびと南アにはして此國に行へ
このあたしなかくんや。七日の間眠くねばば夜くとりゐて祈らぐやとも。ふふ。十次郎も生平ハかれらの諸ざる性なりうど。俄ハ成
らしあひて氣つれ。女手かとぶきて。ムよろう。我ハかくても果ま。
女児が後手やでとかくんやうにいのり得させよ。人氣遠き山中ハ
通霄とりゐ居ま。猛獸魑魅のあり多んもこゝ流りとも。是ハ実
ありとて家ハ僕れ乃ハて。常ハ枕上ハおきて弟の護とされぐ
こそ。偷兒ハも奪ま。ごりけま。是を帯行くよとてみるとあまこ
くびいこまやれどあひていくるに。主人の命背さうており戴た
みぐら。遂のわど佩行んも佩氣ハしと。筵ハ包こうちかくげこぐ

出行々れ。此氷上山北辰妙見宮と崇こそ。推古天皇十七年周防の
國都濃郡青柳の浦れ松の拂ハ。大なる星降くく七盈夜光ハ放
せり。國人奇異おりふとこ流ふ。ゆゑて巫人ハ憑くく外國の太子とのふふ
帰化まふ。その擁護の為ハ北辰降まりこ告ふよりて。其地ま社を
建く妙見尊星といそひまり。青柳の浦を降松とあくくあ呼ぶ。
琳聖太子十代の裔長門守茂村長門の國大内の縣ハ移し。茂村
より十二代を経こ。左京太夫弘世の時ハ。此氷上山ハ移しあくく
ゆ造りて後こ。本社のかくま。社僧の構より。神門。石階。瑞籬。拝殿
燈籠のこゝびまでいまへあくるにまくり。今義興の時ハ及び
て。弘世より代こ八代。年こ百五十年とこゝて。莊嚴いしや。
社頭こいとこのこびね。摧平ハひど流なれ道なれ。山坂

ともせど日の入りもつれほどに社ふいろう。幣代にてまつり。後覆
寐もやすび祈念おとこれるゆ。夜明まで家ゆ帰りて。あのぶる
ぞきつどぞ知為にて。又夜そとりれ。かくさるゆ七夜ふうつれ
夜丑こどりあやありきん。一の大星社所の松の梢ふ陽ふと
見しふ。ふうつふ割ぶんぼくゆひくれ童子現身のひて。ゆよ汝
ぶ誠意唯七夜ふあふつれて。神のあれとえうくど。主従も行
とえふくのかるべし。今曉汝ぶ主家ふ難あり。とくかくりて敬へし
とのさまひ。又りとの星となりて天ふ上りまふ。驚きてあるりと
これふ。七夜まで森ざりし労ふて忍びまどろこれうちの愛
かとおりくど。異香なれ鼻をうちて微妙の声耳底ふのとり。かさ
おけなさ公ふ徹てふーとぐこ。枕上なれ刀の苞をうさぐり。

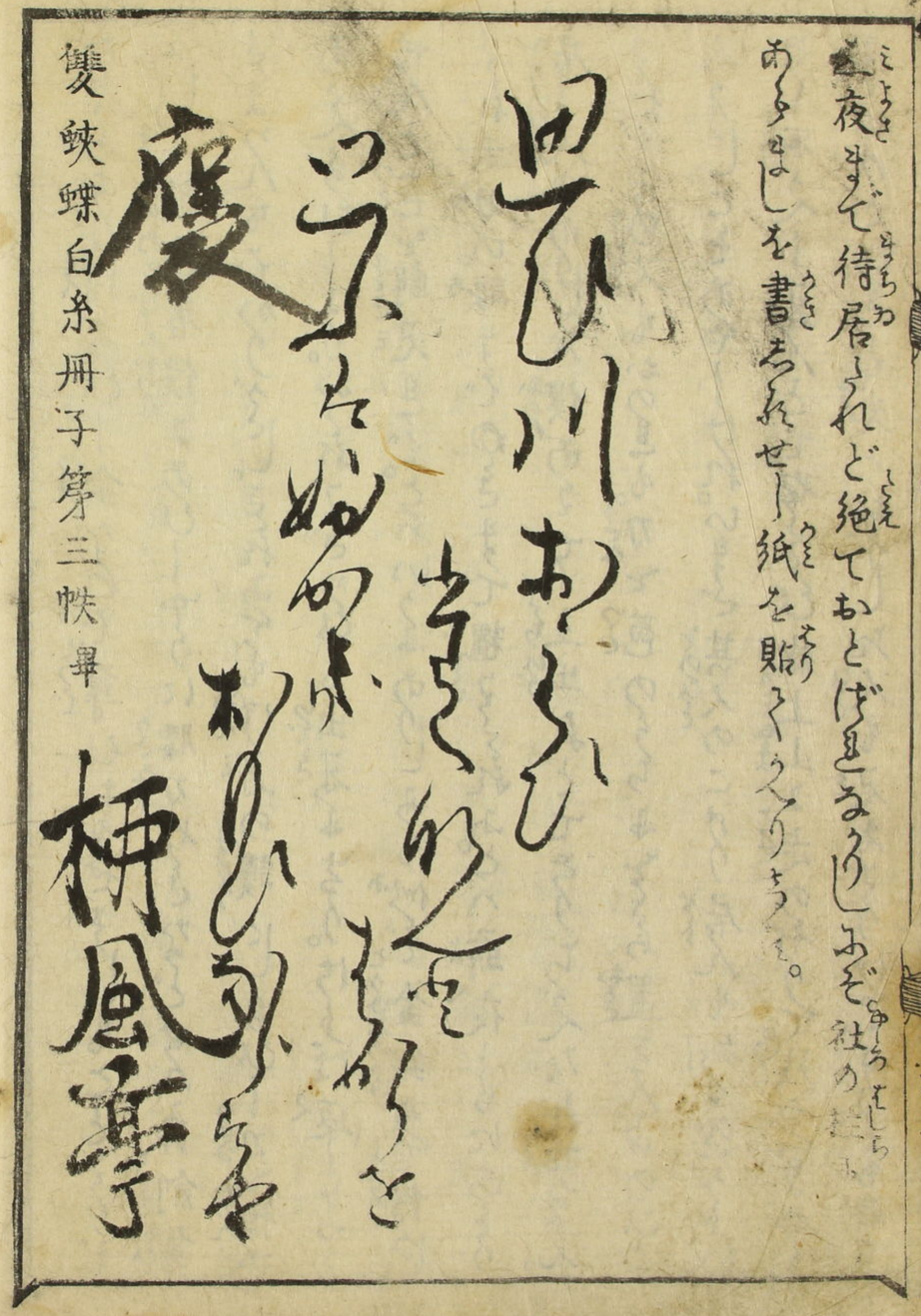
いそぐれくこ立出れふ。附そ夏のじゃ上弦の月いろう落く。星明
も樹ぎりあひてあやなれど。通ひなれゆれ道をぐとて踏もま
よとて花がごとくに立帰て。遥ふえれで未ほのぐくさだう
ゆふ絲と。扣多く負し男の我家うにして出れふ。胸さぐれて
走りかくて。皮籠をとうへひくこぐこふ。彼男肩ふ掛られ索ゆ
ぐぜで。權平を皮籠とふ犬唇よどうと倒くを。彼男ふり
かりさ腰刀ひさやさてもうびじに切付ふ。權平ハ身をひし
苞なぐふ刀をとりて。うけつ。ぐじつ。うちあふうちふ。東の方ぐみ
ぐり。鳥塘を出ふ。彼男をとの手どひさぐじて逃ぐり
ぐり。權平を森れくれ扣取をどぐせが跡を追ふふ公ふく。そのえ
主人の身の上をぐふ。内のゆうをさしのぐけぐ。主人も乳母

權平妙見の
告わうして
主くの
あやまちを
助ける

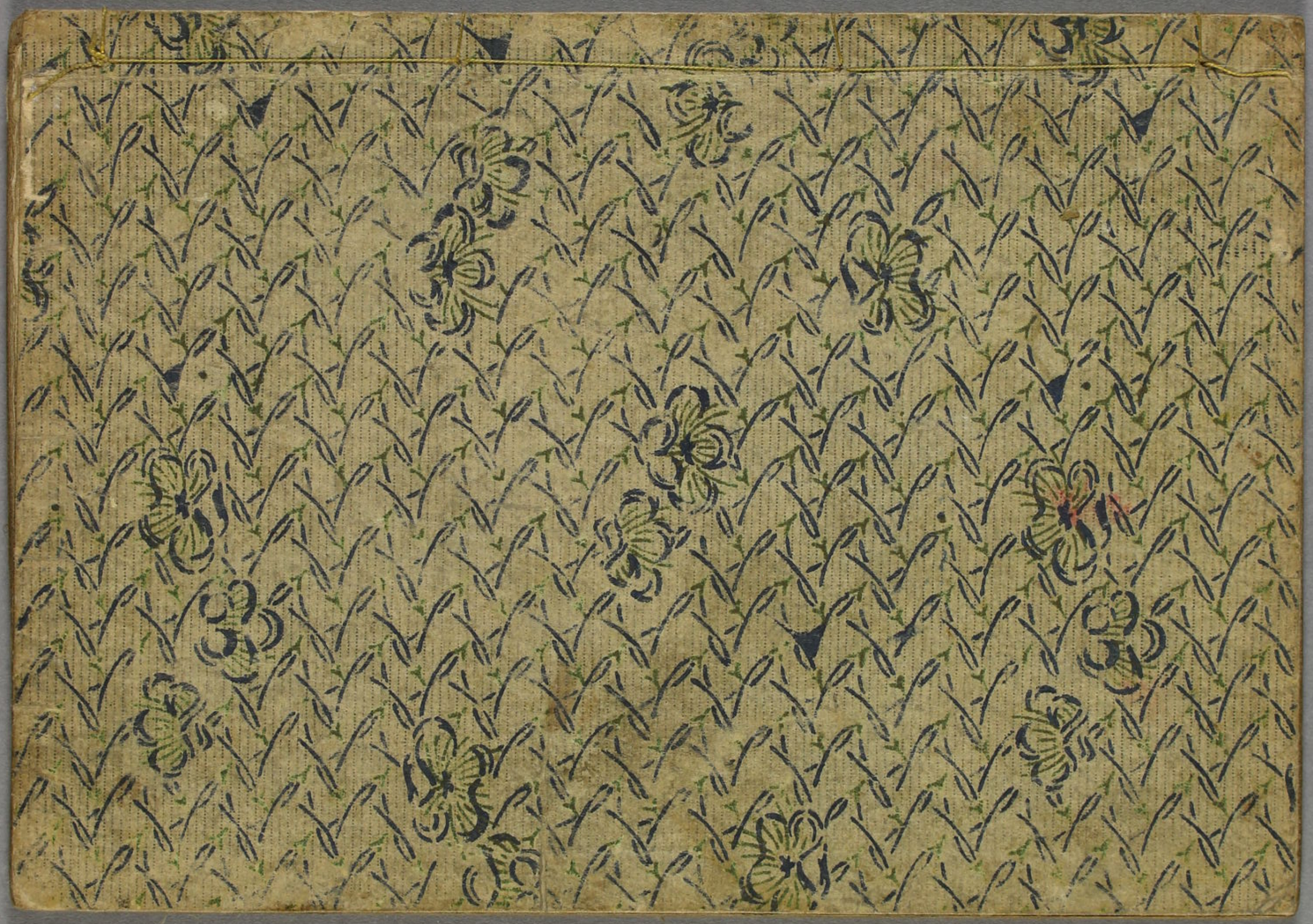
も左右ゑ倒れ居る。四支もわなゝひえこゝろしれず。薬を含ませ。水をそゝぎ辛うして息生ぬ。互ゑ顔見えしてありしるべども語り出す。其夢のたゞはざりしるさに。前路さんらのもしくぞんぢ。十次兵衛此夜客衣服をとゝのゝえ長櫃をたゞめ。富れ付の余波ありて。扨ゑ撫のこと也。副刀。紫鬼茄袋。捺子。懸錘。香嚢。花瓶。自鳴鐘。数多の銀ふあつべき拵ゑハめもうけど。乳媼ゞ盤皮籠とのこ貧ひて立出しそ。女兒が装金を此皮籠の底ゑ藏ゝ置しをうかゞひ知りし者の所為ゑ有べし。我こゑくわさゑ聲うけて立むうしゑ。乳媼も起出ゝゞ。枕屏風ふけまばき傍ゑゝれ卧肚を。夜客右の脚さし延てつよゝゝと。我こゑば左の手して突ゝれゞ致命處ゑやあらうもん。その後のゝゝそ不知といふゑ。權平を阿石の方の父上をゆゝくとひたうし。又彼夜客僕ゑあひゝゝゆうに腰刀わきなどせんゑい創負まうんもとかりゞし。されゑ彼の護としまひゝ刀を撲ゑあゝゝゑひゝより。かゝれそざうひも出ゝゑ。ちふば返ゝけゝゝせんと苞を解ゝ。とゝいうゑありしゑも似ゞ金銀ゑて餞ゝゝれ太刀の眼まゞゆきまで瓔ゝゝれふ。とハ前夜ゝもにあゝゝり居ゝ人のありし。僕あゝてゝ立出れとてとりちゞへたれゑ。されどその人もおのゝも。刀を苞のうちゑゝゝ置ゝんゝのひとゝうしとそあやゝけれ。いまゞ其人のこゝり居んも知るゞうゝ。とゝ聚ゝゝんとて。ゆゝくびゝ氷上山ゝ走のゞりて。残るくるゑく尋ゑ行ゝとも。ゝゞ。夫とゑゞしゝた人も見えゞりけゝ。さりゝもとて

夜すがら待居られど絶ておとづるるしみぞ社の杉

あるゝはしを書ちらせし紙を貼るくるりちらし。



雙蛺蝶白糸冊子第三帙畢

慶

柳風亭